



脱げない靴をつくる

削蹄師

藤田太郎

(自署)

「削蹄(さくてい)とは脱げない靴をつくること」…牛の削蹄師・藤田太郎さん(26歳)。馬の蹄鉄を装着する装蹄師の仕事と似てはいるが、「削蹄師」が具体的にどんなことをするか知る人は少ないと思う。小春日和の12月15日、彼の母校・勢多農林高校の上泉農場を訪問。削蹄作業を見学した後、インタビュー取材してきた。

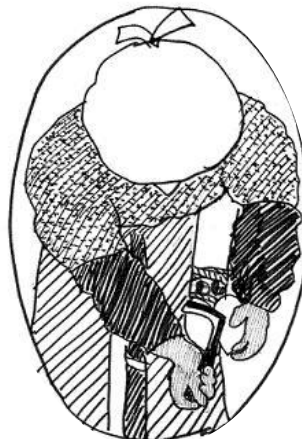
削蹄師の仕事とは？

『牛は偶蹄目に属し、蹄(ひづめ)は内蹄と外蹄からなる。蹄が伸びてくると、通常は足の面で支えていた体重が踵にかかる。すると、血マメが出来、剥離や腐らん、蹄骨の沈下などの蹄病(ていびょう)が歩行困難を引き起こし、ひいては内臓疾患の原因にもなる(右下図参照)。蹄に問題を抱える牛は多い。そこで、半年に1回のペースで削蹄をする。削蹄師は内外蹄を揃え平坦にし、接地面をハート型になるよう均等に削蹄する。また、蹄病に処置を施し、酷い場合は獣医に連絡する。牛の健康に関する削蹄師の役割は大きい』。

作業しながらの説明は理路整然！

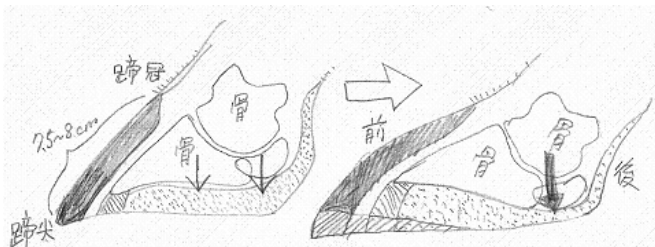
削蹄作業

私たちが牛舎に入ると、藤田さんが一頭の乳牛を牽いて連れてきた。嫌がる牛を“MY削蹄枠”に胴体や足、尻尾までを動かないよう縄で固定する。



削蹄が進むとハート型が浮かび上がる

まず、鉈(なた)で“荒落とし”し、蹄冠(ていかん)から蹄尖(ていせん)まで7.5~8cmに蹄形を整える。次に蹄の裏を“さらう”。“さらう”とは、削り取るといった意味合いのようだ。最後は端蹄(はづめ)廻し。鑢(やすり)をかけ、鋭角になった部分を丸めることで、牛の体や乳房を傷つけるのを防ぐ。



蹄の前部がのびてくると踵の部分に体重がかかり炎症をおこしやすくなる

作業を見ていると、痛々しく顔をしかめたくなる。「牛は痛くないのですか？」と聞くと藤田さんは首を傾げたが、実際牛は涙をぼろっと落としていた。

彼が熟練した手つきで作業するなか、私たちは削蹄される牛の様子をうかがったり、写真撮影をしたり、と周りをウロウロ。さぞ、目障りだったことだろうと思われるが、彼は手を止めることなく、牛や削蹄についての質問に丁寧に答えてくれた。



作業後には道具の手入れも自ら行う

削蹄師への道のり

非農家の家庭で育ち、小学校時代は獣医になりたかったという。高校は勢多農へ進学したが、勉強が苦手なので獣医は諦めた。当時を知る倉林元教諭によれば、「ギラギラしている生徒が多い中、彼は落ち着いていた。何か遠い未来をみているようだった」。

勢多農の資源動物コースの実習時に「削蹄師」という仕事を知った。卒業後は群馬県立農林大学校（酪農肉牛コース）で2年間学んだ。校内で牛の削蹄に来ていた大河原削蹄師に在学中に弟子入り。その後更に、大河原削蹄師の親方である原氏に師事。

農林大卒業時には社団法人日本削蹄師会が認定する二級認定削蹄師、2011年には一級認定削蹄師になった。

修業時代の厳しい生活

群馬県内に削蹄師は十数人。それぞれが各農家と個別に契約する。

決して多くはない仕事の間、さらには“口で売り込むのではなく、自らの技術でお客を得ろ”との親方・原氏の教え「営業はするな」との厳しい言葉。藤田さんは削蹄師として独立後2年半くらいは満足な収入を得ることが難しく、奥さんに食べさせてもらっていたという。

息子と弟子

息子は3歳。削蹄の現場に連れて行くと、「とわい（怖い）」と泣いてしまうらしい。

「息子さんに後を継がせたいですか？将来、弟子をとりたいと考えていますか？」と聞いてみた。

「息子が継ぎたいと言えば、親子で一緒にするのもいい。でも、彼次第」と優しい父親の顔で答えてくれた。

「弟子はライバル（商売敵）になる。子どもが育って生活に余裕が出来たら…と考えているが、息子がやりたいと言ったときに他に弟子がいると厳しい。彼が将来の道を決めてから、考えたいと思う」。

将来の目標

2011年9月、日本装蹄師会が主催する関東甲信越地区・牛削蹄競技大会に出場し、準優勝。競技は、牛の姿勢や歩き方や蹄を見て蹄病やその対処方法を書き記す“削蹄判断”と削蹄をおこなう“実技”。地区大会の優勝・準優勝・3位入賞者は全国大会への出場権を得る。全国大会では成績が奮わなかったと残念がった。

最後に目標を語ってもらった。

「全国大会で3位入賞した経歴を持つ親方の原氏を超えること。…でも、ベテランになってしまうのが怖い」。向上心を持ち続けたいという削蹄の仕事に対する彼の真摯な気持ちが伝わる言葉だった。

（文責：下田、撮影：長谷川、カット：倉林）

